

人形浄瑠璃(文楽)の歴史

文楽は、わが国における伝統演劇の一つです。世界でも珍しい人形劇といってもよいでしょう。「文楽」という呼称は、幕末期に活躍した人形浄瑠璃芝居の経営者・植村文楽軒うえむらぶんらくけんにあります。この人形芝居の劇場が「文楽座」と呼ばれ、いつの間にか芸能そのものを指すようになったのです。

文楽は、物語に節をつけて語る「浄瑠璃じょうるり」、それを演奏する「三味線しゃみせん」、それらにあわせて操られる「人形」の、三つから成っています。



1 義太夫(ぎだゆう)節のはじまり 語り物の発達

浄瑠璃はだいたい室町時代の中期(15世紀末)から始まりましたが、江戸中期(17世紀後半)に、竹本義太夫が現れ、義太夫節をおこしました。これが人気を集め、これ以後は浄瑠璃といえば義太夫節を意味するようになりました。

2 近松門左衛門の登場

近松門左衛門が登場するまでは、浄瑠璃の内容は古めかしい縁起物や武勇伝でしたが、彼はそれらを人物の心の動きをも描写する優れた劇文学まで高め、元禄16年（一七〇三）の『曾根崎心中』で、初めて「世話物」のジャンルを、浄瑠璃で確立しました。

3 竹・豊（ちくほう）時代 文楽の黄金時代

竹本義太夫がおこした竹本座のほかに、義太夫の弟子の豊竹若太夫が豊竹座を始めました。竹本座は、人物の心理描写を重んずる地味で重厚な芸風、豊竹座は、はでで技巧的な芸風と、それぞれが人気を呼び、それぞれの頭文字をとって「竹豊時代」とよばれる文楽の黄金時代がありました。



4 人形の歴史 三人遣いの完成

竹本義太夫が竹本座をおこしたころは、まだ人形も小さい一人遣いの形でしたが、次第に改良が加えられ、やがて三人で一体の人形を操る三人遣いになりました。人形の大きさも、現在の人形に近い大きさになりました。

人形浄瑠璃の舞台も、三人遣いの完成とともに、ほぼ現在の形式に固定したと思われれます。